



研究室訪問

## 冷戦の終焉は平和社会の 始まりではなかった

この20年ほどの間に、世界は二つの大きな変化を経験しました。一つは戦後の世界を支配してきた冷戦の終結であり、もう一つは経済のグローバル化です。

ソ連邦はやがて崩壊すると、多くの専門家は予想してはいましたが、何十年も先のことと見ていました。しかし現実には1989年、東欧で相次いで共産党体制が瓦解、11月には冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊し、12月にゴルバチョフ・ブッシュ両首脳は冷戦の終結を宣言、翌90年には東西ドイツが統一されました。この89年から90年にかけての一連の動きとそ

情報化、ボーダレス、新秩序  
国際問題は、既に国家のわくを越え個人の問題である



の波及の速度を正確に予測しえた専門家は、誰もいなかったのです。冷戦の終結に世界が期待したのは平和でしたが、この願いが裏切られたことはご存じの通りです。むしろ逆に、旧ユーゴスラビアなどでの民族紛争、さらには中東での戦争と国際秩序は不安定の度合いを深め、今日のイラクでの事態に至っています。

## 90年以降のグローバル化が生み出した新しい富、そして経済格差

一方、90年代に加速されたグローバル化は、新たな富を生み出し、世界を豊かにしてくれるだろうと期待されていました。ここでも現実には起こったことは、期待とは裏腹。貧富の差はさらに拡大し、一握りの勝ち組対多数の負け組という構図を生み出しています。さらにグローバル化の原動力となったIT技術の進化は、デジタル・デバイドという新たな格差を生み出すことにもなったのです。

これらの変化はあまりにも急速に進展しているため、研究対象としては現状を把握するのに精一杯というのが実情です。しかし、これからの世界をさらに変化させつづけることは確実。今後どうなっていくのだろうと、知識と知恵を巡らし、想像力を駆使して取り組んでいくことになります。ここ

に、国際関係を学ぶ醍醐味と面白さの一端があると私は思っています。

### 国家間の垣根が低くなり 国家には、新しい役割が 期待されている

グローバリゼーションの進行は、情報と経済、人の交流を急速に押し進めました。このことは、国際関係の構造をダイナミックに変化させるとともに、国家とはいったいどういう存在なのか、これからの国家はどうなるのかという大きな問題を生み出すことにもなったのです。いま世界は、巨額のマネーが一瞬で国境を越えて移動し、情報が瞬時に駆けめぐる時代を迎えています。ボーダレス化が現実のものとして

進行し、国と国の垣根が低くなっている現在、国家はもう過去のものだという見方をとる人もいます。しかし、かつて主権国家がもっていた硬い殻が破れ、ゆるやかな紐帯へと変化していくのではないのでしょうか。私は、国家は以前とは異なる役割が期待されていくのではないかと、つまり国家という機能自体が変わっていくのではないかと考えています。

国家の主権者である国民の意識はいま、ますます多様化しています。右向け右の統制は通用しません。一方で経済と政治がせめぎ合い、他方で国民の価値観がバラバラな時代だからこそ、政府は国家のビジョンとそのためになすべきことの優先順位を明示し、国民に問題提起をする必要があると思います。そして、国民も、国家の課題を当事者として受け止め、どういう社会が自分たちにとって望ましいのかを考える必要があると思います。なぜならグローバリゼーションの潮流は、社会や国家だけではなく、個人をも巻き込んでいくからです。

### 変化こそチャンス それを力に変えられるのは自立した個人

冷戦の終結のように、予測を超えた「何か」が大きく時代を変えることは、今後も大いにあり得ることです。また、グローバル化の進展につれ、ビジネスはもちろん日常生活のなかで異なる価値観や文化とふれあう機会はますます多くなっていくことでしょう。人間は未知なるものに遭遇したとき、一瞬たじろいだり、拒否反応を起こしたりしがちです。しかし、実は変化こそチャンス。かつてのタコソボ型の集団社会が揺らぎつつあるいま、日本が向かうべきなのはキチンと確立された個人と個人が、ある種の連帯を結び合う成熟した社会です。自分の生き方を大事にする人は、人の生き方を尊重できるもの。自分で選択し、リスクをとって行動できる、豊かで成熟した社会を形成していくためには、世界とその構造を知り、国家・社会というものを知り、他者を知り、自分を知ることが不可欠。若い人びとにとって、国際関係を学ぶことが、その契機となることを期待しています。(談)

法学研究科教授  
野林 健  
Takeshi Nobayashi



1945年生まれ、1974年、一橋大学大学院博士課程単位修得。法学博士。研究テーマは国際関係における政治と経済の関係、外交政策の決定プロセスなど。近著に「国際政治経済学・入門」(共著、有斐閣、2003年)。68年、学部時代に冷戦真っ只中・ベトナム戦争泥沼化のアメリカへ留学したことが、国際関係に興味をもったキッカケ。学生時代から趣味は多彩で、現在パワー系ではウエイト・トレーニング、癒し系ではショパン、リサーチ系では現代建築・都市文化・ポストモダンアートの探索・評論を楽しんでいる。「4年後の定年退職を機に、建築・美術分野への転進を図る」とか。